

幼小の連携と幼稚園教育の在り方 —相互理解による幼小連携—

筆頭発表者 平岡 望美（みのり幼稚園教諭）
柴田 徹郎（みのり幼稚園園長）
指導・助言者 篠原 祝子（鹿児島国際大学准教授）

■主題設定の理由

教育基本法や学校教育法の改正によって、幼稚園教育要領の改訂が行われ、家庭との連携とともに強調されていることが幼稚園と小学校との連携である。

幼稚園教育要領には、「幼稚園においては、幼稚園教育が小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることを配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにする。」と、幼稚園教育と小学校教育の連携について述べてある。言い換えれば、幼児教育に期待されていることは、子どもが豊かな生活体験を通して、遊びの中の学びを身につけることと、自ら自己を發揮したり、抑制したりしながら、人間関係を深めることであり、このことが小学校以降の生涯にわたる生活や学習の基盤を作ることになるということができる。これらのこととを実現するためには、幼稚園と小学校との連続性の中で、連携が十分に図られなくてはならない。したがって、幼小連携についての研修はますます重要性を増し、幼少連携は今後の幼稚園教育に欠かせないものである。また、小学校指導要領の中にも幼稚園との連携が打ち出されており、小学校においても幼小連携の在り方を十分理解してもらい、共に取り組むとともに小学校区を中心として地域を含めた取り組みが重要になってくる。

連携の方法としては、教師間の交流はもちろんのこと子ども同士の交流を実施できる研究体制を確立し、相互基盤に基づく実践をすることが必要である。

以上のようなことを踏まえ、幼稚園教育の本質が生かされる中での幼小のよりよい連携の在り方を考えてみたい。

■研究の方法

- (1) 小学校との連携の在り方について協議したり、幼稚園教育要領についての理解を得たりするとともに相互の教育課程に位置づけた活動を考える。
- (2) 交流についての事前の連絡会をもち、相互の教育・保育活動のねらいが達成できるような展開を考える。

(3) 幼稚園における幼小連携についてのアンケート調査を実施して、幼小連携の望ましい在り方を考える。

■プロセスの実践例

1. 5歳児と5年生との交流
2. 新1年生の授業参観と研究協議
3. 秋祭りへの参加
4. 入学前の小学校見学
5. 小学校へつながる実践カード
6. 幼小連携に関するアンケート
7. 他園での実践例
 - ・小学校と合同で公園清掃・焼き芋
 - ・幼小合同研修会

■研究の成果

幼少連携を推進するにあたっては、まず幼児期の教育を充実させることが大切でありその上に立って、子ども同士の交流、教師間の交流、接続期のカリキュラム・スタートカリキュラムの作成などが考えられる。今回の研究の推進にあたって、隣接する小学校の全面的な協力を得ることができた。管理職も交えた研究協議、教育課程への位置づけによって、幼少連携の推進が年間の見通しをもって計画的に進めることができた。このことは、今後の交流活動、連携に深くつながるものである。

これまでの年長組と1年生との交流は従来通り計画に基づいて実施され、所期の目的は達成されている。

今回の、5年生との交流では、園児が一段と目を輝かせながら活動し、5年生は自たちの役割が果たせたという満足感が味わえたようである。活動が終わっても放課後幼稚園に遊びに来たり、手作りの飾りなどを届けてくれたりするなど、子どもたちの交流が広がり、深まりもできたことは大きな成果である。また、私たちの研究を基にして、同じブロックの幼稚園や小学校で、教職員の合同研修が実施され、幼小連携の取り組みが更に深められていることはすばらしいことである。

実践例① 5歳児と5年生との交流

【交流学習事前打ち合わせ】

- (1) 小学校長・園長による幼小連携についての協議
 - ・幼稚園教育要領による幼小連携の在り方について
 - ・相互の教育課程への位置づけについて
- (2) 相互の管理職及び関係職員による協議
 - ・幼稚園教育要領・小学校指導要領についての研修
 - ・幼小連携の進め方について

◎ 小学校5年生のねらい（総合的な学習の時間） 単元「地域を知り地域と共に生きる」
・自分と日常生活や身近な地域とのかかわりの中で、自ら課題を選んだり見つけたりして主体的・創造的に問題を解決していくことができる。

◎ 幼稚園の活動のねらい（制作活動）
・季節の変化に気づき、落ち葉や木の実を使って動物園をつくる。
・5年生と一緒に作品を作り上げていく中で小学生とのふれあい、楽しさを味わう。

◎ 5年担任との連携
※ 時間を設けて打ち合わせを行い、また、電話などで連絡を取り合った。お互いに細かな連携を図ることで、スムーズに進めていくことができ、また、小学生・幼稚園の実態についての理解にもつながっていった。

交流をするにあたって小学生・幼稚園児がお互いに気をつけなくてはいけない点、また教師が気をつけなくてはいけない点などの確認を行った。

- ・活動に当たって留意すること

園児	<ul style="list-style-type: none">・分からぬことは、自分で小学生に聞くようする。・約束を守って活動を行う。
小学生	<ul style="list-style-type: none">・幼児が主体的に行えるように補助的サポートをする。・アイディアを引き出したり進めたりできるようにする。
幼稚園 教諭	<ul style="list-style-type: none">・全体を見通しながら必要に応じて援助をしたり言葉かけを行う。・環境設定の工夫を行い、児童・幼児が活動しやすいよう配慮する。
小学校 教諭	<ul style="list-style-type: none">・小学生の幼児への関わり方など状況に応じて指導を行い、児童が動きやすいように配慮する。
全体	<ul style="list-style-type: none">・自ら、児童・幼児に話しかけ、和やかな雰囲気の中で交流ができるようする。・安全面に十分に留意していく。

◎参加人数

小学生参加人数（30名）	幼稚園児参加人数（31名）
<ul style="list-style-type: none">・5グループに分かれての活動。幼稚園児がクラス内で分かれている5グループに合わせて小学生にも事前に伝えて5グループに編成してきてもらう。・当日はまずグループの組み合わせから行う。小学生に幼稚園児のグループにそれぞれ移動をしてもらう形で声かけをし、グループ作りを行った。	

5年生との交流活動のまとめ

	子どもたちの様子・活動	教師の援助と留意点
11月 (1回目) 幼稚園 10:00～ 11:15	<ul style="list-style-type: none"> 初めはお互いに戸惑い慣れなかったが、小学生がリードをしながら進めていたので次第に打ち解けた。 すぐに名前を覚えたり、自分の名前を伝えたりしながら親しみをもってかかわることができた。 ゲームのやり方を教えてもらいながら楽しく遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 間に入りながら様子を見守り、必要に応じて声かけを行った。 安全面には十分に配慮をしながら楽しく行えるように全体把握に努めた。
まとめ (1回目)	お互いが緊張してどのように関わればいいのかが分からずに初めはよそよそしい感じであった。しかし、小学生がゲームを準備していたことで、ゲームを通して次第に打ち解けあうことができるようになっていった。今回は小学生がうまく進めながら、また、幼児に対しても優しく声をかけたり、かかわったりしたことで、幼児も安心感をもって小学生と触れ合うことができた。	
11月 (2回目) 幼稚園 10:00～ 11:20	<ul style="list-style-type: none"> 動物園にいる動物のイメージがうまく出てこないため思うようにできないところがあった。 小学生と一緒に手を添えて描いたり、アドバイスをしたりしながら進めていった。 1回目よりも幼児と小学生のつながりができる、和やかな雰囲気の中で活動ができた。 	<ul style="list-style-type: none"> イメージがつかみやすいように絵本などを提示し、分かりやすいように工夫を行った。 良いところは他のグループにも伝えながら更なる意欲をもてるようにした。 教師が巡回をしながら援助した。5年生のリードが適切であった。
まとめ (2回目)	2回目の交流ということもあり、和やかな雰囲気の中で活動が進んでいった。小学生は幼児に対してのかかわり方が少しずつ分かってきたようで、また、どの程度の援助をすればよいのかも考えながら行うことができた。幼児も小学生とのかかわりが楽しくなり少しずつ信頼もよせていったように感じる。	
11月 (3回目) 幼稚園 10:50～ 11:50	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちで材料を選び、思い思いに制作をしていった。 分からぬところや難しいところは小学生が手助けをしたり教えてもらったりしながら行った。 出来上がった作品をグループごとに発表。 子どもたちはすっかり打ち解けて、相互の立場を大事にしながらの活動ができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動に対しての期待がもてるような環境づくりや声かけを行った。 幼児が主体となれるように小学生に対してかかわり方について話を行った。 一緒に教師も共感しあいながら頑張ったことを認め、一人一人が満足感を味わえるように努めた。
まとめ (3回目)	思うようにできないところもあったようだが、最終的にはうまい具合で小学生が補助的な立場で進め仕上げることができた。一緒に作り上げた喜びはとても大きいもので、小学生も幼児も満足感を味わうことができたのではないかと思う。回を重ねていくごとに、お互いの表情も和らぎ、思っていること・考えしたことなどを伝えあいながら活動をすることができた。更に関係が深まりよい交流となつたように思う。	